

今年の5月5日のこどもの日に、子供についての新聞の論調はどのようなものか？と思って、駅の売店で、朝日・読売・毎日をはじめ、いくつかの朝刊を買い求めてその子どもに触れた「主張や記事」を読んでみました。殆どが「進む少子化」ということで、この25年間に15歳未満の子ども人口は1000万人も減ったと言う話題が中心でした。そして主張は、「ぬくもりを子どもに」とか、「信頼される大人が周りにいるか」など、家族や地域社会の教育力についてふれたものが目を引きました。中でも産経の主張は、「孤は徳ならず道しるべに」という題で、戦後の個人主義の価値観が誤って孤人主義を生んでしまった。と述べ、論語の「徳は孤ならず、必ず隣あり」を引き合いにして。逆もまた真だ。「孤は徳ならず」子どもの日を機に、それを社会共有の道しるべとしたい。と結んでいました。

それで、ちょっと思い出しましたのは、福澤先生の御長男一太郎さんが福澤諭吉の言行を表した「独立自尊」と、「孤立自負」という用語を比べたお話です。

明治33年に「独立自尊」という言葉が発表された時、一太郎さんは、「孤立自負」の「孤立」はただ一人他から離れて立つことを指した言葉で孤立無援などと使い、他に頼る人がいない、助ける人がいない様子である。それでは「独立」はどうかというと、自ら他に頼らない、助けを求めないことで、他との違いに価値を置いて、お互いにその価値を認め合うことである。つまり「孤立」は他から離れて自分一人の世界に閉じこもってしまう消極的な様子を示しているが、「独立」は自ら他に頼らないという積極的な様子を示している。

また「孤立自負」の「自負」はどうかというと、自負は自分の行いに自信を持つことで、「日本一の腕前と自負している」などと使う。その「自負」に対して「自尊」は自分を卑しめずに品位を保つことを指す言葉である。つまり「自尊」は一人ひとりがお互いにその生きる喜びを認め合う、相互の関係に於いて一人ひとりを大切にしようという認識に他ならない。「自負」も「自尊」も、ともに自分を誇りに思う事ではあるが、「自負」が自分一人の行いを誇るだけであるのに対して、「自尊」は人々が「互に助け助けられる」ことに価値を見出す行為である。と話されたのでした。

福澤諭吉の生涯の言行を一言で表す、我々なじみの「独立自尊」こそ、今の子どもたちの「心の闇」に問いかける大切な言葉ではないかと思っている次第です。